

<b>Title</b>	文化とキリスト： sacrament 的アプローチ（組織神学研究：共同研究報告）
<b>Author(s)</b>	兼松, 誠
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4 : 22-23
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2667">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2667</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【組織神学研究】  
文化とキリストー sacramental 的アプローチ

11月29日の組織神学研究センター研究会で、イギリスのダラム大学名誉教授アラン・サゲート (Alan M. Suggate) 氏による講演が行われた。参加者は12名であった。講演は、氏があらかじめ用意していた原稿を読み上げる形で為された。会の参加者にはその翻訳文も用意されていた。通訳を務めたのは、聖学院大学総合研究所教授・藤原淳賀氏である。

サゲート氏の講演は、世俗化の時代における教会のあり方をめぐるものであった。キリスト教徒は、あの世とこの世の二つの共同体に対する忠誠の間で強烈な緊張関係のもとに置かれている。サゲート氏は、個人は秩序ある共同体に属しており、そこにおいて人類の共通の利益と同様にそれを超えた天の生を求めるべきであると力説する。

かつてアングリカンのテンブルは、我々は sacramental 的世界に生きていると考えた。そこに見受けられた楽観論は、イングランドの労使紛争、社会紛争、そしてナチズムの台頭によって修正を受けるけれども、テンブルは世界の受肉的そして sacramental 的見解を棄て去らなかつた。テンブルは、聖餐式はキリスト教礼拝の中心だという。



講師のアラン・サゲート ダラム大学名誉教授(右)  
通訳の藤原淳賀・聖学院大学総合研究所教授(左)

サゲート氏は、まさにこの聖餐式に注目する。第一に聖餐式は言葉ではなく、なされた何かである。聖餐式は、一度限りのカルバリにおいて成し遂げられた、キリストにおいて神がなされた偉大の救いのわざを黙想し現臨させる。第二に聖餐式は共同の行為だということである。人々が教会に来るのは、キリストの体を作るためである。この時代に、もし神の王国が確立されるなら、それはキリストと共にあり、取られ、祝福され、裂かれ、御力の内に解放された人々を通してである。 sacramental approach の長所は、この世の具体的な現実に、そして信仰の現実に、我々を正面から向かわせることであると、サゲート氏は言う。

(文責: 兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

(2010年11月29日、聖学院本部新館2階)